赤土考

桑田六郎

一

隋煬帝の時、四方の蕃族入朝する者頗る多かりき、その中海を渡りて來る者は、林邑・倭・赤土・流求を主なりとす。林邑は大業元年劉方是を破りてより入貢を絶たず。倭は四年三月夫の「日出處天子、致書日沒處天子、無恙」と云ふ書を送り來りしかば、翌年裴清を遣はして交通を開けり。赤土は三年十月煬帝南海に通ぜんとする志あり、使者を募りし時、屯田主事常駿等是に應じ、赤土に使せしかば、翌年三月入貢せり。流求は始め朱寬を遣はして招撫せしも、從はざりしを以て、六年陳稜兵を以て是を討ち、王を斬り民を虜へて歸れり。是等は人々の概ね知る所、而して其等の諸國の位置も略定まりて疑ふ者少かりしが、吾人かつて南海の研究を初めし時、以上四國の中赤土に關して疑を起せり。何者人皆赤土は今の暹羅なりと云へど、隋書(卷八二)赤土傳には赤土の北は海なりと云ひ、常駿は狼牙須國の山を西に見て南下せりと云ふ。狼牙須は馬來半島にありしもの、然らば赤土は寧ろ半島以南に求むべきにあらずや。是に於て研究の歩を進めし所、隋の赤土は唐の室利佛逝に同じと云ふ結論に達せり。

依つて今稿を改めて世の批判を仰がんと欲す。

赤土なる名は、主として大業年間に用ゐられ、唐初には明かならざれど、義淨の時代には此の名は絶えて見ざるなり。されば赤土の史料としては、專ら隋書に據らざるべからず。隋書には次の如き記事あり。

イ 大業四年三月景寅、(1)遣屯田主事常駿、使赤土致羅罽。(2)(卷三煬帝紀)

ロ 赤土國、扶南之別種也、在南海中、水行百餘日而達、所都土色多赤、因以爲號、東婆羅沙國、南訶羅旦國、北拒大海、地方數千里、其王姓瞿曇氏、名利富多塞、不知有國近遠、稱其父釋王位出家爲道、傳位於利富多塞、在位十六年矣、有三妻、並鄰國王之女也、居僧祇城、(中略)煬帝卽位、募能通絶域者、大業三年屯田主事常駿、虞部主事王君政等請使赤土、帝大悅、賜駿等帛各百匹、時服一襲而遣、齎物五千段、以賜赤土王、其年十月駿等自南海郡乘舟、晝夜二旬、每値便風、至焦石山而過東南、泊陵伽鉢拔多洲、西與林邑相對、上有神祠焉、又南行至獅子石、自是島嶼連接、又行二・三日、西望見狼牙須國之山、於是南達鷄籠島、至赤土之界、其王遣婆羅門鳩摩羅、以舶三十艘來迎、吹蠡擊鼓、以樂隋使、進金鏁以纜駿船、(3)月餘至其都(中略)。(4)駿以六年春、與那邪迦於弘農謁、帝大悅、賜駿等物二百段、俱授秉義尉、那邪迦等官賞各有差。(卷八二列傳)

ニ 婆利國、自交阯浮海、過赤土丹々、乃至其國。(同上)

ホ 大業四年三月、五年二月、及六年三月、赤土入貢。(卷三煬帝紀に據る。)

隋書以外のもの、例へば舊新唐書・通典・太平寰宇記・御覽等に赤土の文字散見する記事あれ

ど、隋書に本づかざるものは、皆如何はしきものなれば、第六章に總括して列擧すべし。　唯新唐書(卷五八)藝文志に常駿使赤土國記二卷あり、恐らく隋書赤土傳の據る所なるべし。

1 唐の代祖元皇帝の諱昺を避けて、景を以て丙に代ふ。
2 羅刹の誤。第三章注26參照。
3 月餘は誤りなるべし。
4 四年の誤。煬帝紀所云四年三月ば即ち駿等歸著の時なり。

二

赤土に關する考證は、明以前には是れ無きが如し。　明代黄省曾は是を印度に求めしも、張燮出でゝ暹羅說を唱ふるに及び、後世皆その說を繼承するに至れり。

黄省曾の柯枝 Cochin 說　費信の星槎勝覽小葛蘭の條に曰はく

其國山連赤土、地與柯枝國接境、日中爲市、西洋諸國之馬頭也。

と。　小葛蘭と柯枝とは、武備志の末尾所附航海圖にも見え、印度の Quilon と Cochin なること一般の定說なり。(1)　費信はこゝに「山連赤土」と云へど、此の赤土を以て隋の赤土國と關係せしめず、又暹羅の古名として赤土を擧げず。　然るに其の後正德中、黄省曾は西洋朝貢典錄を作り、その小葛蘭の論に

小葛蘭、星槎編又云小咀喃、云其國山連赤土、日中爲市、而赤土者、爲扶南之別種也、西則婆羅

沙國、東則婆羅剌國、南則呵羅旦國、不知何者爲小葛蘭也。

と云ひ、柯枝の論には

柯枝國、凡雨半載而霽、霽半載而雨、不知大化胡爲其然也、昔魏徵叙赤土、云其國冬夏常溫、雨多霽少、理庶幾矣、必曰半載、其果親目之乎、然赤土今與小葛蘭爲隣、其卽爲柯枝章々矣。

と云ふ。　然れども「雨半載而霽、霽半載而雨」は熱帶の印度南洋地方にて、普通十月より翌年三月までを雨季、四月より九月までを乾季とするを云へるに過ぎず。　又魏徵の「冬夏常溫」と云へるは、云ふまでもなく、「雨多霽少」と云へるは、常駿の三年十月に南海郡を出發し、翌年三月に歸れるを以て、丁度南洋の雨季に遭遇せるを明かに示せり。　黃省曾はかゝる熱帶の事情に通ぜず、且は費信の赤土を輕々しく、隋の赤土と妄信せるに由り、遂にかくの如く赤土を印度に置かんとするに至れるなり。

張燮の暹羅說　張燮は明末萬曆の人なり、其の東西洋考[2](卷二)西洋列國考に曰はく

暹羅在南海、古赤土及婆羅剎也、以赤土之故、後人訛爲赤眉遺種、[3](中略)唐貞觀時、婆利羅剎與林邑使者偕來。(唐書曰、婆利東卽羅剎也、常駿使赤土、遂通中國。)

と。

張燮は貞觀の時、婆利・羅剎の使者、林邑の使者と共に來れる故婆利、羅剎は林邑の隣國なるべく、今の暹羅に當ると考へ、更に進んで、羅剎は常駿の赤土に使せる時、中國に通ぜる者なれば、常駿の赤土も羅剎と近き理なり。　されば赤土も亦林邑の隣り、今の暹羅の地にありしならんと考へたる如し。　然れども羅剎婆利を詳細に研究する時は、決して是を暹羅とすア

能はざること容易に知り得る所なれば、從つて赤土に就きても、考察を改むる必要を生ずるに至る。依つて章を改めて婆利・羅刹を論ずべし。

1 史學雜誌編十四、頁一〇三七—一〇三九。

2 東西洋考の東西洋の區別は今日の用法とは全く異なり、西洋とは交阯・占城 Phanrang・暹羅・下港 Bantam・柬埔塞・大泥 Patani・舊港 Palembang・麻六甲 Malacca・啞齊 Achin・彭亨 Pahang・柔佛 Johor・丁機宜 Tringanu・思吉港 Grisee・文郎馬神 Banjermasin・池悶 Timor 等を云ひ、是等の間の航路を西洋針路と云ふ。又東洋とは呂宋・蘇祿・貓里務 Palawan?・美洛居 Molucca・文萊 Brunei・雞籠淡水(臺灣)等にして、東洋針路に屬するものなり。當時かゝる東西洋の區別一般に用ゐられしや否や、他には徵すべきものなし。是より先き、黃省曾の西洋朝貢典錄には、蘇祿・琉球・浡泥 Brunei をも含めり。淸代新地理學發達するに及んでは、本より此の法は用ゐられず。

3 大明一統志卷九〇暹羅の條に「暹乃漢赤眉遺種」とあり。但し其の故解すべからず。

三

一、婆利考

婆利は是を Sumatra に求むる者あるも、その說く所、誤謬少からず、從ひ難し。Pelliot 氏の Java の東 Bali 島となせるを正しとす(1)。

梁書(卷五四)扶南の條に曰はく

扶南東界卽大漲海、海中有大洲、洲上有諸簿國、國東有馬五洲。

と。扶南は今のCambodjaに當る故、[2]大漲海は卽ち南支那海なり、而して諸簿は Java なること論なし。馬五は Pelliot 氏馬立は或は馬里の誤りにて Bali なりと云ふ。[3]

舊唐書(卷二四七)に

訶陵國、東與婆利、西與隋婆登、北與眞臘接、南臨大海。

とあり。新唐書(卷二二二下)は是を改めて

訶陵國、東距婆利、西墮婆登、南瀕海、北眞臘。

と云ふ。訶陵に就きては、一時 Schlegel 氏に由り馬來半島說提出せられ、[4]次いで石澤氏是を敷衍せしが、[5]後に Pelliot 氏は杜佑と賈耽を引用して "Deux Itinéraires de Chine en Inde (a la fin du VIIIe Siécle)" を書き Schlegel 氏を反駁せり。[6] 又藤田氏も狠牙須國考中是に論及する所あり。[7] 訶陵既に Java なること疑なしとして、其の東の婆利西の隋(或墮)婆登に就きては Groeneveldt 氏は東西を誤讀し、[8] Pelliot 氏は婆利は Bali に當てたるも隋(或墮)婆登に就きては說明する能はざりき。[9] Schlegel 氏等は訶陵を誤解せるを以て是に其の說を述ぶる要なし。然れども是は困難なる問題にはあらず。通典太平寰宇記等を參照すれば、隋(或墮)婆登は單に婆登とあるべきものなるを知り得。卽ち次の如し

婆登國、在林邑南、海行二月、東與訶陵、西與迷黎車接、北隣大海。(通典卷一八八)

隋婆登、在林邑南、海行二月、東與訶陵、西與迷黎車接、北界大海。(舊唐書卷二四七)

婆登國、在林邑南、海行二月到、東與訶陵、西與迷黎連接北隣大海。(唐會要卷一〇〇、太平寰宇

記卷一七七）

墮婆登、在環王南、海行二月乃至、東訶陵西迷黎車、北屬海。（新唐書卷二二二下）

是によりて、又「西與迷黎車接」は「西與迷黎連接」の誤りなるを知る。迷黎車にては如何にも說明すべからずと雖も、迷黎なれば義淨の南海寄歸內法傳の末羅越、大唐西域求法高僧傳（卷下）玄達律師の條の末羅瑜と比定し得。然らば訶陵と迷黎との間に存する婆登は、西部 Java ならざるべからず。尙ほ是を宋書（卷九七）の闍婆婆達及婆達と比較すれば益ゝ明かに Java の一國なるを知り得るも、煩はしければ第五章にて呵羅單を說く所に讓る。兎に角、西より數へて迷黎・婆登・訶陵・婆利と進めば、婆利は Java の東なる Bali なること疑なし。

梁書（卷五四）に、干陁利[11]（Palembang or P. Condor）狼牙須[12]を「在南海洲上」或は「在南海中」と云ひながら、獨り

婆利在廣州東南海中洲上、去廣州二月行。

と云ふ。その間多少の差異を認めずんばあらず。されど Borneo 島にはあらず、此の島の Brunei は勃泥國[14]として宋初太平興國二年初めて入貢せること、太平寰宇記（卷一七九）等に明記す。按ずるに廣州より東南と云へるは新唐書（卷四三下）地理志に「又兩日行到軍突弄山（Pulao Condor）又五日行至海峽（Malacca st）。番人謂之質、南北百里、北岸則羅越國[16]（Singapore）、南岸則佛逝國（Palembang）。東水行四五日、至訶陵國（Java）。」と云へる如く、一旦南下して更に東行するが故なるべし。例へば又諸蕃志に「闍婆於泉州爲丙巳。」「三[15]佛齊在泉正南」と云ふと共に

「三佛齋在眞臘闍婆之間」と云ひ、嶺外代答も亦曰はく「三佛齊、在南海、諸水道之要衝也、東自闍婆諸國、西自大食古臨〔Quilon〕諸國、無不由」と。要之、此の梁書の婆利も Java の東の Bali と考へざるべからず。

然る時は以上三箇の例により、Bali 島は早くより支那に知られしものと認め得。されば是より推論して、他の記事不十分の爲め明かならざる婆利も、亦此の Bali を云へるものと考へ得べきにあらざるか。

隋書(卷八二)に

婆利國、自交阯浮海、過赤土丹丹、乃至其國。

と云ふ。丹々は史料不十分の爲め、其の名の屢々現はるゝに拘はらず、其の位置明かならず。諸説あれど定論とすべきもの無し。[19] 舊唐書(卷二四七)は梁書及隋書を改作して「婆利國、在林邑東南海中洲上、自交州南渡海、經林邑扶南赤土丹々數國乃至焉」と云ひ、新唐書(卷二二二下)環王傳は是を更に改めて「婆利者、直[20]環王東南、自交州汎海、歷赤土丹々諸國乃至、地大洲多馬、亦號馬禮」と云ふ。新唐書は又

貞觀時、林邑王頭黎、獻馴象鏐鎖五色帶朝霞布火珠、與婆利羅剎使者偕來。

と云ふ。冊府元龜(卷九七〇)に由れば、是れ貞觀五年の事なり。然るに冊府元龜(卷九七〇)によれば、此の後婆利の入貢絶えて無く、その代はり貞觀十六年乾封二年總章二年及景雲四年に婆羅入貢す、常に林邑の使者と偕に來る。されば後の婆羅は前の婆利と同じ、唯文字を變

じたるのみ。唯何故常に林邑と共に入貢するか明かならず。
義淨の南海寄歸内法傳に婆里洲あり。[21]段成式の酉陽雜俎(卷一八)にも婆利國あり、龍腦香樹を出す、呼んで固不婆律と云ふと。[22]是に就き Hirth 氏等は Sumatra の北端の Perlak 附近とし、[23]藤田氏はその説を臆斷なりとし、更に詳密なる考證を要求す。[24]固より南洋の龍腦香の産地は Borneo, Sumatra 及馬來半島にして Java, Bali には産せず。然れども南海の海上交通の自由なる所にては、自島に産せざるものを使用し、或は貢物として支那に齎すは容易に行ひ得る所なり。例へば新唐書(卷二二二下)訶陵傳には龍腦香を使用するを記し、太平寰宇記(卷一七七)婆登國の條には、その産物中に是を數へたり。又他の例を以て云へば、新唐書によれば訶陵は金を産すれど、元來金は Java には産せず。是を以て石澤氏は訶陵は Java にあらざる一證となすも、[25]訶陵の Java たるは、他方に確證あり、動かす能はざるなり。宋書(卷九七)に婆黎國あり、元徽元年入貢す。是等は位置の記載は無きも Bali として差支へなし。かくの如く解すれば、張燮の「暹羅古赤土及婆利羅刹地也」と云へる婆利の暹羅説は誤解なること明かなり。然らば次ぎに羅刹は如何。

二、羅刹考

先づ新唐書(卷二二二下)環王傳に曰はく

其(〇婆利)東羅刹也、與婆利同俗、隋煬帝遣常駿使赤土、遂通中國。

婆利は Bali なれば、羅刹はその東方なり。貞觀五年婆利の使者と共に入貢せる羅刹もと。

亦同じ。是れ唐代の羅刹なり。而して同時に當時南海交通は婆利を東の境とし、その以東に就きては明かなる智識を有せざりしを知る。何となれば、羅刹は佛典に屢々現はるゝ惡鬼なり。男を羅刹又 Raksasa 女を羅刹私 Raksasi と云ふこと、皆人の知る所なり。(26)

次ぎに、唐の羅刹と隋の羅刹と同じものなりや否や。新唐書は是れを同一に見る。抑々隋の羅刹は隋書(卷三煬帝紀)に

大業四年三月景寅、遣屯田主事常駿、使赤土致羅罽

とあるに本づく。「致羅罽」は「到羅刹」の誤字なり。(27)

按ずるに此の羅刹は赤土そのものを指し、赤土の他に或る特定の羅刹ありて、常駿その地に到れりとは解し難し。何となれば隋書赤土傳は一言も羅刹に言及せず。殊に新唐書の如く、婆利の東の羅刹と同一に見るが如きは、不可能なり。常駿は何の必要ありてかゝる所に赴かんや。又若し行けりとすれば、その途上に當る闍婆・婆利等に就きても、何らか云ふ所無かるべからず、然るに赤土傳には一言も無きは、其の行かざる證なり。要之、隋書の羅刹は赤土を指し、新唐書の羅刹は婆利以東の未知の地を云ひ、兩者各其の內容を異にす。

以上婆利考及羅刹考によりて、婆利・羅刹に關する張燮の謬見は略々明かにせられたりと信ず。最後に張燮の暹羅說の一理由に、赤土と暹羅に崇佛の類似あり。曰はく

國王……尙釋敎、國人效之、(赤土傳曰 其俗敬佛)

と。然れども是れ亦張燮の誤解なり。唐代南海一般に佛敎の弘通せることは、義淨により

て知り得べく、その中に室利佛逝・訶陵を最も盛なりとす。されば崇佛の點を以て赤土の比定を試みんか、比定に迷はざるを得ず。但しその後南海地方に回敎の侵入ありて、明末には Sumatra, Java, Borneo 等悉く回敎王 (Sultan) の支配下に移り、[27]佛敎は唯印度支那半島及 Bali の小島にのみ行はるゝに過ぎざるに至れり。從つて張燮は嘗つて Java, Sumatra 等に佛敎隆盛を極めしを忘却し、誤りて當時南海第一の佛敎國たる暹羅を以て、上代の赤土と考へしか。

清代にては、明史を始め魏源の開國圖志、顧炎武の天下郡國利病書、廣東通志等皆張燮の說を繼承し「暹羅古赤土也」と云へども、別に新しき硏究無し。

1 Bulletin, t. IV, p. 270–271, 282–283. (以下用ふる略稱の解は篇末に合載す)。

2 扶南に就きて、是を暹羅に當て、唐初には眞臘を Cambodja に、扶南を暹羅に置き、兩者對立すとなすものあり。世に行はるる歷史地圖は皆是に屬す。然れども是れ大なる誤なり。扶南は終始 Cambodja を中心とする國にして、隋代眞臘是に代はる。而して暹羅には別に國あり、隋代投和(太平寰宇記卷一七七)と呼び、唐代に墮羅鉢底(西域記卷十)杜和鉢底(南海寄歸內法傳)獨和羅(新唐書卷二二二下)と稱す。扶南は南齊書(卷五八)に「在日南郡之南、大海西灣中、廣袤三千餘里、有大江水、西流入海。」又梁書(卷五四)に「在日南郡之南、海西大灣中、去日南可七千里、在林邑西南三千餘里、城去海五百里、有大江廣十里、西北流東入於海、其國輪廣三千餘里」と云ふ。日南郡は今の Quangnam 附近より北方に亘りて比定すべき故、その南大海は勿論南支那海從つてその西大灣は暹羅灣の如し。されど梁書(卷五四)に「扶南東界卽大漲海」と。大漲海は南支那海なり。又大江あり、西北より流れて東方海に入るもの、Mekong 河を除きて他に求むべからず。されば扶南は Mekong 河下流域なること論

無し。Pelliot 氏は扶南は Cambodja なるも、廣く西方に及べることありと云へど、その擧ぐる所の證容易に從ひ難し、縱ひ一時的に西方に擴まりしことありしとするも、既に投和國の名聞ゆる隋代以後に及んでは、自ら Menam 河流域との間に境界ありしと見ざるべからず。扶南の位置のみに就きては、かく簡單なれども、扶南と眞臘との關係は頗る困難なる問題なり。

隋書卷八二に「眞臘國在林邑西南、本扶南屬國也、其王姓刹利氏、名質多斯那、自其祖漸已强盛、至質多斯那、遂兼扶南而有之、死、子伊奢那先代立、居伊奢那城」と。質多斯那は Pelliot 氏の云ふ如く Çitrasena にて、その銘刻は Mekong 河東岸 Sambor, Kratie 間の Thma Krê 及支流 Semun と會合する邊 Phou Lakhon, or Chan Nakhon に發見せられたり。伊奢那先は Içanasena にて Mekong 河東岸 Ang Chumnik (Chaudoc の東方銘刻に列擧せる Rudravarman, Bhavavarman, Mahendravarman, Içanavarman, Jayavarman の第四番目たり。Mahendravarman, Bhavavarman は Phou Lokhon の銘刻に Çitrasena は Viravarman の子、Bhavavarman の弟、Bhavavarman の後を嗣ぎ Mahendravarman と云ふとあり。Pelliot 氏は Rudravarman の死後繼承の爭ありし時、その子にあらざる Bhavavarman 位を簒ひ、Rudravarman の後繼者となれるか。何となれば Bhavavarman の境域は、西は Battambang より東は Mekong 河畔に及べること明かなれば、簒奪者は隋書の云ふ如く質多斯那にあらずして、その兄 Bhavavarman ならんと (Bulletin, t. III, "Le Founan")。然れども刻銘上の研究によりて、扶南・眞臘の語原に光明を與ふること能はざるは遺憾なり。從つて通典(卷一八八)扶南傳に「大唐武德後亦頻來貢、貞觀中又獻白頭國二人於洛陽」と云へるもの、或は南海寄歸內法傳に「占波即是臨邑……西南一月至跋南國、舊云扶南」とあるを如何に解すべきか、明らかならず。本より跋南國は西域記の伊奢那補羅(即ち隋者の伊奢那城)なることは疑なきも、果して跋南なる名は當時用ゐられしや否や、その用ゐることの適不適の判斷はその語の意味に本づかざるべからず。藤田氏は眞臘は宋の趙彥衛の雲麓漫鈔に「眞臘亦名眞里富」とあり、宋會要、宋史等に眞臘の屬國眞里富を記す、眞里富は Siem-reap にて暹羅人が Cambodja の古都 Angkor に對する名、然らば眞臘も亦その對音なりと云ふ(東洋學報卷八頁一九七―一九八)。按ずるに宋の眞里富は Siem-reap なるべし、されど Siem-reap

は Angkor の南なる村及其所を流るゝ河の名なり。 而して Angkor Tom (=Large Nagara) の暹羅名は Nakhôn Luang, or Phrah Nakhôn Luang なり。 (The Imperial. 1904 A.D. p. 381) (附圖參照)

[3] Bulletin, t. IV, p. 270.

[4] T'oung Pao v. X, p. 159-163. 氏は宋書(卷九七)に「呵羅單國治闍婆洲」とあるを、馬來半島の Kelantan と解し、音の似たる上、隋書に赤土の南は呵羅旦と云へば、赤土は暹羅なれば、正に南北にて、符合すと云ひ、從つて闍婆洲は今の Java にあらず、又新唐書(卷二二二下)に「訶陵亦曰社婆曰闍婆」とあれば、訶陵も馬來半島なりと云ふ。 氏の説には二つの誤因あり。 一つは呵羅單と Kelantan と餘りに音の似たるに迷はされしこと、二は新唐書(卷四三)地理志に、佛逝國より東水行四五日訶陵國に至ると云ふ賈耽の明文あるを知らざりしことなり。

[5] 史學雜誌編十一、頁一二〇一—一二二五。氏は Schlegel 氏の説を繼承し、宋唐の闍婆訶陵は馬來半島にありと云ふ。 されど氏は專ら Schlegel 氏の説を布衍するに努め、其の短所に注意せざりしため、呵羅單と Kelantan との比定を疑はず、又賈耽の文を逸せり。

[6] Bulletin, t. IV, p. 131-373.

[7] 東洋學報卷三、頁一三〇—一三一。

[8] Notes, p. 58. 117. 氏は The country of Dvatan (闍婆達) is situated to the South of Cambodja (環王) at a distance of two months, going by sea. It lies at the east of Kaling (Java) and the west of Mi-li-kü, (迷黎車) on its north it has the sea. と讀み迷黎車を Molucca に當つ。

[9] Bulletin, t. IV, p. 279-280.

[10] 末羅瑜に就きては議論あり、第五章に説明すべきも、その位置 Java の西方なることは論無きなり。

[11] 第五章註1參照。

[12] 東洋學報卷三狼牙須國考。

[13] Bulletin, t. IV, p. 229, note (4)(5)

14 Chau Ju-kua, p. 155. 東洋學報卷三、頁二六一—二六二。 Crawfurd 氏によれば、Borneo なる島名は歐洲人來航後 Brunei に本づきて起れるものなり、(A Descriptive Dictionary of the Indian Islands and Adjacent Countries, p. 68)。東西洋考(卷五)に「文萊國即婆羅國、東洋盡所、西洋所自起也」と云ふ、東洋針路を按ずるに文萊は確に Brunei なり、nei と萊は轉訛にて Manila を蠻里刺と譯する如し(開國圖志卷一八)。

15 東洋學報卷三、頁一三二。

16 同上。Hirth, Rockhill 兩氏は Ligor 或は半島の南端となすに對し、藤田氏は末羅越の畧にて Singapore となす。第五章註3參照。

17 Chau Ju-kua, p. 63. 藝文、卷四、號四。

18 Chau Ju-kua, p. 12.

19 Bretschneider 氏は Natuna 說を出せしが、Groeneveldt 及高楠氏は Siam の南 Malacca の北なりと云ふ。(I-tsing, p. xviii) Schlegel 氏は赤土を暹羅とし、婆利を Malacca 海峽に求めし故、且々を半島東岸の Datur に比定す (T'oung Pao, s. II, v. II, p. 116)。されど吾人の赤土 Palembang 婆利 Bali 說によれば、丹々はその間に求むべきなり。

20 環王は當に林邑と書くべし。何となれば、通典(卷一八八)林邑の條に「今之環王國、主即梵志之後」と云ひ、新唐書(卷二二二下)には林邑は「至德以後號環王」と云ふ。

21 I-tsing, p. xlix.

22 Chau Ju-kua, p. 194. 東洋學報卷三、頁二六四。

23 Chau Ju-kua, p.194.

24 東洋學報卷三、頁二六四。

25 史學雜誌編十一、頁一二一三。

26 佛教大辭典に曰はく、羅刹國は食人鬼の住處、大海中にあると云ふ、法華經普門品に「入於大海、假使黑風、吹其船舫、飄墮羅刹鬼國」西域記十一に「佛法所記則曰、此寶州大鐵城中、五百羅刹女之所居也」と。

27 太平寰宇記(卷一七七)に「羅刹國大業三年使常駿到焉」とあり、太平御覽(卷七八八)には「羅刹國大業三年常駿使赤土國致羅刹國」とあり、新唐書(卷二二二下)環王傳には「其東羅刹也、與婆利同俗、隋煬帝遣常駿使赤土、遂通中國」とあれば「致羅刹」は「到羅刹」の誤なりとす。 罽は一本に罽と書く、刿と刹と相似たり、誤字の本か。

28 Bulletin, t. IV, p. 285.

29 南洋の回教傳播に就きては回教徒の記錄ありてその歷史も畧明かなるべきも、是を支那史料と比較研究することは未だ行はれず。 唯桑原博士の研究の中に多少論及せらるゝ所あるに過ぎず。されど博士の研究中に次の如き誤謬あるは注意すべし。 蒲壽庚第三回註十七に、博士曰はく、諸蕃志卷上眞臘國の條に其の國俗を記して「以右手爲淨、左手爲穢、取雜肉羹、與飯相和、用右手掬而食之」とあるは、明に太平寰宇記(卷一七七)眞臘國の條に「以右手爲淨、左手爲穢、飲食多酥酪沙糖餠(飯?)飲食之時、先取雜肉羹、與餠(飯?)相和、手擩(掬?)食之」とあるに本づきしものにて、何れもイスラム教徒の風習なり。 眞臘國は占城國と相隣接し、而して占城國は上に述べし如くイスラム教徒の來往假寓せし所なれば、かゝる風習の存在せしも怪むに足らずと。 然れども實に太平寰宇記は更に隋書(卷八二)眞臘傳の「以右手爲淨、左手爲穢、每旦澡洗、以楊枝淨齒、讀誦經呪、又澡洒乃食、食罷還用楊枝淨齒、又讀經呪、飲食多蘇酪沙糖、秔粟米餠、飲食之時、先取雜肉羹與餠相和、手擩而食」とあるに本づき、是はイスラム教徒の風習にあらずして、佛教徒の風習なり、何となれば隋代眞臘に回教徒の風習傳はる理なし。 是を西域記の「夫其清潔自守、非矯志、凡有饌食、必有乞盥洗、殘宿不再、食器不傳、瓦木之器、經用必棄、金銀銅鐵、每加摩瑩、饌食已訖、嚼楊枝而爲淨、澡漱未終、無相執觸、」(堀、解說西域記頁一二七)及「手指斟酌、畧無匙箸」(仝、頁一六一)と比較すれば益〻明かなり。 匙箸を用ゐず、右の指を用ゆる故、自ら右手を淨とす、而して左手を不淨に用ゆること、今日印度・波斯・土耳古等に通じて一般の風習なり(長瀨、土耳古及古耳古人頁九四參照)是れ匙箸を用ゐざる自然の結果なり。

四

以上支那人の説を述べ來りしが、是より西洋の東洋學者の説を述べ、是を批評せんと欲す。

Groeneveldt 氏の説　氏は張燮等の説を參考して、赤土を暹羅灣內の或る地點となせり。[1] 而して新唐書(卷二二二下)環王傳に「赤土西南入海、得婆羅」及「婆利東卽羅刹也」と云へるを解し、婆羅婆利は共に Sumatra の北端にありし國、羅刹はその西 Nicobar 諸島なりと云ふ。[2] 氏の說には前に述べし如く、東西の誤讀ありて、婆利を誤解せる上、是に亦羅刹に關して東とあるを西に曲解せり。

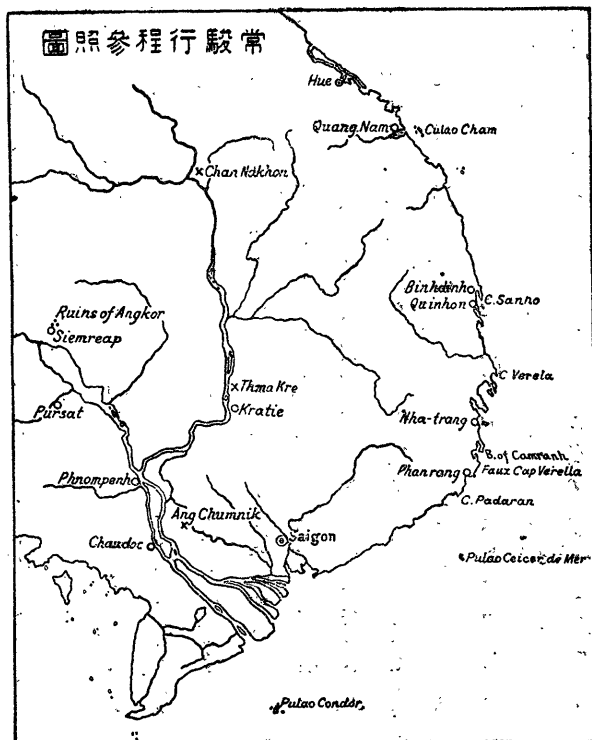
Schlegel 氏の說　氏は宋書(卷九七)訶羅單を音の類似より無批評的に半島東岸の Kelantan となし、更に隋書(卷八二)赤土傳所云赤土の南なる訶羅旦も亦同じく考へて、赤土の暹羅なるを確め、且云ふ赤土の西婆羅沙は卽ち婆羅刹にて、東方 Bienho (Grand Lac) の南なる Pursat なるべく、北の大海は南支那海なりと。[3] 婆羅刹は婆利羅刹なること已に述べし所殊に氏が方位を考ふるに際して、唯南のみ正しとし、東、北を無視せるは、其の故解すべからず。

Gerini 氏の說　氏の論文に "Siam's Intercourse with China" あり、其中に、赤土を論ぜり。氏は曰はく、赤き土の地名を求むれば馬來半島に Tanah-merah (馬來語赤土)、Mekong 河に沿ひて Thâ Din-dëng (in Siamese, Red Earth Landing-place) 及 Wellesley の梵語銘刻に Raktamrittica (Red Clay 今の Mergui) 等あれど赤土は是等にあらず。 赤土は思ふに Menam 河下流の古都 Sukhada な

るべしと、而して赤土の西婆羅婆國はBurmaの古き地名Praksaに當てたれど、東及南に就きては明に斷定する能はざりき。(5)

次に氏は常駿の行程に關して考證する所あり、されど是は藤田氏の批評あれば、此處に其の文を借り、兩氏の解釋を同時に見んとす。(6)

常駿の行程(7)　藤田氏曰はく「常駿等は南海郡より乘舟、晝夜二旬、毎に便風に値ひ、焦石山に至ると云ふ。焦石山他書に見えず、Gerini氏はMui Duong岬の東南一英里半を距るTsen島なりと云ふ、是れ知るべからず。常駿等は又焦石山より東南に過ぎ陵伽鉢拔多(Lanka Vatara?)(8)洲に泊し、且云ふ西林邑と相對し、上に神祠ありと。陵伽鉢拔多洲は殆んど買耽の陵山ならん(新唐書地理志所引)云ふ「(前略)行至占不勞山、山在環王國東二百里海中、又南二日行至陵山、又一日行至門(9)

常駿行程參照圖

毒國、又一日行至古笪國[10]、又半日行至奔陀浪洲[11]、又兩日行到軍突弄山」と。 占不勞山は明に今の Culao Cham, Pulao Cham にて Pelliot 氏の云ふ所の如し。(B.E.F.E.O. IV 200) 又奔陀浪洲の Padaran 岬にして「軍突弄山の島夷誌畧に「崑崙又名軍屯山」とあり、明人崑崙に作るものと同一にして、今の Pulao Condor なること何人も異論なき所なるべし。 此に知る、占不勞山 Culao Cham より陵山に至るに約二日を要し、陵山より奔陀浪洲 Padaran に至るに約二日半を要することを。 然らば則ち陵山則陵伽鉢拔多洲は Qui-nhon の北 San-ho 岬なるべし、灣內港あり、Lang-son と云ふ、殆んど陵伽鉢拔多洲及陵山の遺跡なるべし。 Gerini 氏が陵伽鉢拔多洲を Varella 岬とせしは、南に偏したるに過ぎ、Pelliot 氏が陵山を以て Qui-nhon の北 San-hoi と考定せしは、先づ我が意を得たり。 San-hoi は卽ち San-ho なり、陵山は明かに陵伽鉢拔多洲の異稱、後世の靈山殆んど亦これ。 島夷誌畧に云ふ「靈山嶺峻而方石泉下咽、民居散星、以結網爲活、田野闊宜耕種、一歲凡二收穀、舶至其所、則舶人齋沐二日、其什事崇佛諷經、燃水燈放彩船、以禳本船之災、始度其下、風俗氣候男女、與占城國同、(中畧)舶之往復此地、必汲水採薪、以濟日用」と。 星槎勝覽文概ね是を襲ひて見聞する所を加ふ、此の節も亦同じ、而して均しく齋沐崇佛誦經以て人船の災を攘ふと云ふ。 隋書上に神祠ありと云ふに合す。 此の隋書洲と云ふ、勝覽に「其處與占城山地連接」と云へば、島にあらざること明かなり。 武備志載する所鄭和圖又靈山を以て陸に置く。 Philipps 氏以て Camranh 港側の Davaich-head なりとす (J.C.B.R.A.S. XXI. 40) 是れ Varella 岬の[12]一名固より非なり。 陵伽鉢拔多已に San-ho 岬たり、駿等焦石山より東南に過ぎて、

此の地に泊す、島夷誌畧所謂「船之往復此地、必汲水採薪、以濟日用」ならむ。而して隋書航海畧相似たるものなりしならんとせば、焦石山は、殆んど買耽の占不勞山卽ち今の Culao Cham ならんか」と。

焦石山は Gerini 氏は焦の音似たる故に、Tseu 島なりと云ふ。然らば焦山にて十分ならずや。藤田氏は大體の航路上より推定し Culao Cham かと云ふ。然れども何故焦石山は必ず島と解せざるべからざるか。思ふに焦石山は焦石の山なり。南齊書(卷五八)林邑傳に

有金山、金汁流出於浦、事尼乾道、鑄金銀人像十圍。

と云ひ、梁書(卷五四)には

其國有金山、石皆赤色、其中出金、夜則出飛、狀如螢火、(中略)國王事尼乾道、鑄金銀人像、大十圍、元嘉二十三年使州刺史檀和之、振武將軍宗慤伐之、和之遣司馬蕭景憲爲前鋒、陽邁(〇林邑王)聞之、懼欲輸金一萬斤銀一萬斤、還所略日南民戶、其大臣𧀼僧達諫之、乃遣大師范扶龍、戍其北界區栗城、景憲攻城尅之、斬扶龍首、獲金銀雜物不可勝計、乘勝逕進、則尅林邑、陽邁父子、竝挺身逃奔、獲其珍異、皆未名之寶、又銷其金人、得黃金數十萬斤。(14)

と云ふ。新唐書(卷二二二下)環王傳にも「喜浮屠道、冶金銀像、大或十圍」と云へど、是れ前文に本づく。隋書(卷三一)地理志に林邑郡の領縣四の中に金山あり。而してかくの如き金山は事實なるや、或は林邑の金に富めるより想像せしものか、明かならずと雖も、常駿の焦石山は此の赤色の金山なること疑ひ無かるべし。

陵伽鉢拔多洲は Gerini 氏は Linga-parvata と云へど、吾人は Lanka-parvata と讀まんとす。藤田氏は全く誤解せり。而して Gerini 氏は是を Varella 岬に當て、此の岬は Portugal 人の岬の形 pagoda に似たるより名付けしもの、形かくの如くなれば、土人の信仰あるべく、又神祠もありしならんと云ふ。[15] されど是は藤田氏の云ふ如く、南に偏し「西與林邑相對」に符合せず。藤田氏は是を賈耽の陵山と比較し、陵山を其の異稱とす。果して正しきや。賈耽の研究は先づ Pelliot 氏を以て權威者と見ざるべからず。

Pelliot 氏は占不勞山を以て今の Culao Cham とし、Culao は馬來語の pulao (島の義)の安南音化、而して環王の都は是と相對する Kwang-nam 附近の Dong-duong なりと云ふ。[17] 氏の説は大體正鵠を得たるものの如し。藤田氏は奔陀浪洲を簡單に Padaran 岬となすも Pelliot 氏は岬の北 Phanrang (Pāṇḍuranga) を以て是れに當つ。[18] 奔陀浪洲は船の寄航地なれば當に港を以て當つべく、岬を以てすべきにあらず。

占不勞山を Culao Cham とし、奔陀浪洲を Pāṇḍuranga として、陵山果して San-ho 岬なりや。藤田氏は更に元以後の靈山と比較す。されど靈山は明かに San-ho 岬にあらず。何となれば武備志末尾の航海圖によれば、靈山は新洲港[19] (Qui-nhon) の南なる雞籠山の更に南にあり、又東西洋考(卷八)によれば、靈山は新洲港より九更、[20]赤坎山[21] (Cape of Padaran) より七更に當る。されば是を San-ho 岬とすれば北に偏し、Davaich head とすれば南に偏す、むしろ Nhatrang 附近に求むべきにあらずや。然も Nha-trang には Po-Nagar の遺跡あり、島夷誌略の靈山の記事

と符合するものあり。　島夷誌略は曰はく「靈山嶺峻而方、石泉下咽、民居散星、以結網爲活(中略)舶人至其所、則舶人齋沐二日、其什事崇佛諷經(中略)舶之往復此地、必汲水採薪、以濟日用」と、是に對して Nha-trang は今日重要の港にして、且つ次の事實あり

Nha-trang is noted for its fishing industry. Behind Nha-trang is a lagoon protected from the sea by sand-hills, leaving a narrow strait just wide enough for a fishing boat to pass. This strait leads one to the Ruins of Po-Nagar, i. e., the ruins of the temple of Cham. The ruins stand on a hill and consist of a double row of towers, protected by fences. From here high steps lead to a terrace, where there is a great round hall of pillars (Salle à Piliers). In the middle room of the main tower is a beautiful statue of Uma. The tower is five stories high, and in the façade of its top are carved head of lions cad *makara*, in the fashion peculiar to this region.........An Official Guide v, V, p. 188.

元以後の靈山をかくの如く Nha-trang とすれば、賈耽の陵山とは一致すべからず、何となれば賈耽は占不勞山 (Culao Cham) より二日行、奔陀浪 (Phanrang) より二日半行の所に陵山を置ける故、是は Pelliot 及藤田兩氏の言の如く Sah-ho 岬なるべし。　藤田氏は常駿の陵伽鉢拔多洲を陵山と比定し、陵伽鉢拔多の上に神祠ある、島夷誌略の靈山の記事と似たりとなすも、已に靈山は陵山にあらずとすれば、陵山と陵伽鉢拔多とは同じ陵字を有するに止る。　陵伽鉢拔多 Lankaparvata を譯せば陵伽山にして、陵山にあらず、賈耽の如き學者の陵山と譯する筈なし。師子國に有名なる Lanka parvata あり、新唐書(卷二二一下)に「師子國居西南海中、延袤二千餘里、

有陵伽山」と云ふ、今の Adam Peak なり、而して未だ嘗つて陵山と書けるもの無し。又隋書(卷八二)眞臘傳に「近都有稜伽鉢拔山、山上有神祠、每兵二千人守衞之」と云ふ。稜伽鉢拔は最後に多を脫せしもの、常駿のそれと似たれど是れ眞臘(Cambodja)の稜伽山にして林邑の陵伽山にあらず、前者は常駿の知る所にあらず。常駿は「泊陵伽鉢拔多洲、西與林邑相對」と云ふ。藤田氏は靈山と比較して、陵山は島にあらずと云へど、陵山は靈山と關係なく陵山は陵伽山と異なること、前述の如くなり。單獨に是を考ふるに、林邑の東方の島にて、恰も賈耽の「占不勞山在環王國東二百里海中」によく似たり。されば占不勞山に神祠ありしと云ふ證據なきも、是を陵伽鉢拔多洲と考定して差支へなかるべきか。

次に常駿は「又南行至師子石、自是島嶼連接、又行二三日、西望狼牙須國之山、於是南達雞籠島、至於赤土之界」と云ふ。師子石は Gerini 氏は Catwic 群島中の Pulao Sapatu 若くは Pulao Cecir de Mer とし、藤田氏は Brothers と云へど確かならず。按ずるに、其の形狀獅子に似て珍らしかりしが故、會々常駿等の注意を引けるに止まるべし。形或は色等より支那人の妄りに命名する例頗る多し、例へば銅鼓山・羊嶼・煙筒山・筆架山・鶴頂山・赤坎山・馬鞍山・鷄籠山・佛頭山等は鄭和航海圖・西洋朝貢典錄或は東西洋考に屢〻現はる。但し常駿の師子石は今の何れの島を云へるか明かならず。狼牙須國の山に就きては、Gerini 氏は暹羅灣內の Koh Katin なりと云へど、固より誤る。馬來半島なること藤田氏の說の如し。(24) 「於是南達鷄籠島」を Gerini 氏は誤りて Finally, skirting round the south side of the Island of Chi-lung と譯し、鷄籠島を暹羅灣內の Kiling

島に當つ(26)。然れども鷄籠島は師子石と例を同じくし形の上より名付けしもの、廣東通志附圖によれば海岸に鷄籠島あり、鄭和航海圖によれば占城に鷄籠山あり、西洋朝貢典錄(卷上)爪哇國第三に靈山 (Nhatrang) より Borneo の西側をへて吉利門之山 (Karimon Java) に至る間に鷄籠山あり、されど常駿は馬來半島に沿ひて南下せる故、航路を異にす。

常駿鷄籠島に達せし時、赤土は婆羅門鳩摩羅をして往いて迎へしむ。Cerini 氏は婆羅門鳩摩羅を說明して曰はく、此の名は Kamala, or Kumala なり、Indra Kumala, Candra Kumala は暹羅朝廷にて古代高官の名なり、されば此の鳩摩羅はその何れかならんと[illegible]。然れども Indra は譯せば天主なり、Candra は月なり。Kmiala は童子なり、何れも佛書には屢々見る名稱にて、暹羅の如き佛敎國にて Candra Kumala, Indra Kumala と云ふ官名ありしは怪しむに足らざるなり。されど赤土の婆羅門鳩摩羅は是を簡單に鳩摩羅と云へる婆羅門と解すれば、それにて十分ならずや。鳩摩羅は鳩摩羅提婆・鳩摩羅炎・鳩摩羅什婆・鳩摩羅設摩等、婆羅門には珍らしからぬ名なり。

以上述べし如く、最も詳細を極めたる Gerini 氏の赤土說も一つとして、赤土を暹羅とすべき有力なる根據を發見せず。

是に對して從來赤土卽暹羅說に疑惑を挿める者二人あり。一人は Pelliot 氏にして Schlegel 氏の闍婆・訶陵說を反駁する際、所在に赤土の暹羅なるを疑へり(27)。他の一人は藤田氏にして、氏は曰はく「人概ね赤土を暹羅となす、是れ隋書傳ふる所の內容を精査せずして、明人の謬見

を襲ふ者なり。予別に考定せし所あるも、こゝにさまで必要なければ云はず。唯常駿等の行程を追跡して略狼牙須國の所在を知るに資せんのみ」と。[12] 狼牙須は赤土を知る端緒なり、其の位置明かなれば、次に赤土の位置を定むることを得。又 Pelliot 氏も訶羅旦の説明を徹底せんとすれば、赤土の疑問をも解かざるべからず。然るに兩氏共に是をなさず、兩氏に代はりて、こゝに赤土考を作る所以なり。

1 Notes, p. 82.
2 ibid., p. 80, 84.
3 T'oung Pao, v. X, p. 161.
4 The Imperial, 1900-1902 A.D. Researches on Ptolemy's Geography 參照。
5 Gerini 氏は China Review, v. XIII, p. 379 に載せられし、佩文韻府赤部赤土の條所引隋書(卷三)煬帝紀の記事の誤譯文、即ち In the fourth year of Ta-yek (i.e., in A.D. 608) an envoy was sent to Chih-tu, Chih-lo-chi. の説明に苦心し、Sukhda [or Sukhada-]-[Svar] galoka, Sukhdakhalōk の對音とするも確かならず、尙ほ研究を要すと云へど、是れ「赤土致羅鬪」を捧讀みせるもの、固より論の限りにあらず。(The Imperial, 1901 A.D. p. 155)
6 東洋學報卷三頁一二三―一二五。
7 第一章史料ロ參照。
8 活字の誤植にあらずとすれば、確に氏の誤解なり。
9 Pelliot 氏は門毒を Quinhon とす。(Bulletin, t. IV, p. 217)
10 Pelliot 氏は古笪を Nha-trang の梵名 Kanthara ならんと云ふ。(ibid.)
11 Pelliot 氏は Phanrang (Paṇḍuraṅga) とす。(Bulletin, t. IV, p. 216, note 3)
12 Davaich head の位置明かならず、藤田氏は、Varella 岬の別名となすも、氏の所謂 Varella は Faux Cap Varella (An Official Guide, v, V, p.182-183) なるべく、普通に所云の C. Varella は Nha-trang と Qui-nhon の間にあり。

東洋學報卷三、頁一二三―一二五。

14 Bulletin, t. IV, p. 190-192.

15 The Imperial, s. III, v. XI, p. 156-157.

16 Bulletin, t. IV, "Deux Itinéraires de Chine en Inde (a la fin du VIIIe Siècle.)"

17 ibid, p. 200-202. Kwang-nam 附近の Dong-duong, Ban-lanh, Mi-son に於ける、古き Cham 人の遺跡に就きては、Bulletin, t. IV. に載せたる Finot, "Notes D'Epigraphie vii." 及 Parmentier, "Les Monuements du Cirque de Mi-son" 等參照。

18 ibid., p. 216, note (3)

19 ibid., p. 205; Chau Ju-kua, p. 49, note 3.

20 黃省曾の西洋朝貢典錄(卷上)占城の條に「海行之法、以六十里、爲一更」とあり、東西洋考舟師考には「一晝夜風利所至、爲十更、約行幾更、可到某處」と云ふ。 柴氏は後者のみを以て一更は二時間廿四分と云へど、固より誤なり。(東洋學報卷四頁一一〇)

21 東西洋考(卷二)に「成化中王茶全爲交趾所破、嗣王徙居赤坎邦、遣使請封如故事」と云ひ、又赤坎山(古城王爲交趾所逼、徙居于此)と云ふ。 赤坎邦は Phanrang なれば、赤坎山は Padaran 岬なるべし。 又(卷九)西洋針路に「又從赤坎山(單未十五更取崑崙山)」とあるも參考すべし。

23 若し Pelliot 氏に從ひ新唐書環王傳の「有罪者使象踐之、或送不勞山、畀自死」の不勞山を占不勞山とすれば、占不勞山に神祠あるべき筈なし。 此の點は疑問となるも、不勞山は單に Pulao 即ち島にて、特に占不勞山を云ふにあらずとすれば如何。

23 The Imperial, s. III, v. XI, p. 157.

24 東洋學報卷三狼牙須國考。

25 The Imperial, s. III, v. XI, p. 158.

26 ibid., p. 159.

27 Bulletin, t.IV, p. 273 etc.
28 東洋學報卷三頁一二三。

五

抑、赤土は隋書(卷三)煬帝紀によれば、大業四年三月、五年二月、六年三月の三回入貢せり。冊府元龜外臣朝貢部も亦同じ。而して隋以前に全く赤土の名なく、隋以後唐代に赤土の入貢せる證なし。加之義淨の南海寄歸內法傳及大唐西域求法高僧傳に絕えて赤土の名を見ず。かくの如く赤土は極めて狹き範圍內に存すと雖も、赤土の如き大國にして、突如として隋代に現はれ、突如として其の姿を隱す理あるべからず。必ずや、其の前後或は少くも後には確に他の異なりたる名の下に、支那に知られしならんこと想像に難からず。此の見地より考へて、隋以前に就きては明かならざるも(1)、隋以後に於ては義淨の室利佛逝こそ赤土の後身にあらざるかと思はるる所あり。依つて次に兩者の類似點を擧げて考證すべし。

赤土と室利佛逝　室利佛逝の名は義淨の時代に始めて支那に知られたり。義淨は尸利佛逝或は室利佛逝とし、新唐書(卷二二二下)は室利佛逝或は尸利佛誓と云ひ、或は略して佛逝或は佛誓となす。冊府元龜(卷九七〇)に依れば、長安元年十二月、開元四年三月、同十二年七月、同十五年十一月入貢せり。是れ G. Coedès 氏の云ふ如く、Bangka 島西岸 Kota Kapur の銘刻(686A.D.)馬來半島北部 Vieng Sa の銘刻(775A.D.)及印度 Cola 注輦王朝の Rajaraja 羅茶羅乍一世(985-1012A.D.) Rājendracola 尸離囉茶印陁囉注囉一世(1012-1042 A.D.)の銘刻等に見ゆる Srivija-

ya國なり。[2] 隋書(卷八二)に曰はく、「大業中南荒朝貢者十餘國、其事迹多湮滅而無聞、今所存錄四國而已」と、四國とは林邑・赤土・眞臘・婆利なり。されど通典・太平寰宇記及び太平御覽に由りて、隋時聞えし主なる者を補へば、扶南 (Cambodja) 投和 (Lower Menam) 盤々 (Bandon) 社補 (Java) 丹[3]々 (in Java?) あり。此の中赤土の他は皆唐代にも其の名を傳ふ。是に反し、唐代に有名にして隋代に聞えざるは、室利佛逝なり。加之義淨に由れば室利佛逝は當時訶陵 (Java) と相並んで南海の大國たり、南海寄歸內法傳には南海諸國を西より列擧して「斯乃咸遵佛法、多是小乘、唯末羅遊少有大乘耳」と云ふ、末羅遊は卽ち佛逝なり[4]。隋書赤土傳によれば、赤土は當時南海に於ける佛教隆盛の大國なり。此點兩者相似たり。

次に隋書赤土傳は赤土の四周を說明して

東婆羅剌國、西婆羅娑國、南訶羅旦國、北拒大海。

と云ふ。暹羅說は是を解するに、全く支離滅裂なりき。されど是を室利佛逝の四周と比較するに、略一致す。東の婆羅剌は第三章に述べし婆利・婆羅 (Bali) と同一なるべく、三字となれるは、訛れるか、或は西及南の國各三字宛なるに調和せんが爲めか、何れかに屬すべし。西の婆羅娑は義淨の高僧傳(卷上)に「新羅僧二人、南海汎海、至室利佛逝國西婆魯師國、遇疾俱亡」及南海寄歸內法傳に「從西數、有婆魯師洲・末羅遊洲卽今尸利佛逝國是」と云へる婆魯師と符合す[5]。高楠博士は Chavannes 氏の說に從ひ、婆魯師は新唐書(卷二二二下)室利佛逝の條に「以二國分總、西曰郎婆露斯」と云へる郎婆露斯及 Marco Polo の Java the Less の Felec と同じく、今の Par-

alāk 地方なりと云ふ。[6] Schlegel 氏は是に反して婆魯師は十七八世紀の或る地圖に Indragiri, Plembang の間に記されし Baros なりと。[7] 按ずるに婆魯師は買耽の婆露[8]を以て比定すべし。後者は Sumatra の西北端の如し、從つて位置は Marco Polo の Felec と似たり。新唐書の郎婆露斯は婆露斯の誤りか。南の訶羅旦に就きては、Schlegel 氏は宋書(卷九七)に「呵羅單國治闍婆洲」と云へると同じく、馬來半島東岸の Kelantan なり、從つて闍婆も Java にあらずと云へど、Pelliot 氏の詳しき反駁あり、其の誤解なること明かなり。[9] 今 Pelliot 氏の說に少しく蛇足を加へんに、宋書(卷九七)によれば、元嘉七年訶羅陀王堅鎧は毗紉・婆田兩使を遣はし表文を獻じ、同年呵羅單國は金剛指環・赤鸚鵡・天竺國白疊古貝[10]・葉波國古貝[11]などを獻ぜり。而して同十年に呵羅單王毗沙跋摩は毗紉を遣はし入貢す。毗沙跋摩は Vijaya Varman (勝冑或勝鎧) なるべく訶羅陀王堅鎧と同意味なり、されば訶羅陀と呵羅單は同一國を誤りたるなり。次に「呵羅單國治闍婆洲」の闍婆は普通 Java を云へど、印度の瞻波 (Champa) を云ふことあり、例へば新唐書(卷二二二下)驃國の條に「自號突羅朱、闍婆國人曰徒里拙」[12]とあり、此の闍婆は遠く離れし Java にあらずして、西隣の Champa なり。[13] 然れども呵羅單の治むる闍婆は Champa にはあらず、何となれば Champa は嘗つて羯餧伽 Kalinga の領土たりしことなし。されば闍婆洲は Java にて、呵羅單 Kalinga Dvipa は本國の羯餧伽を云はず、Java に建設せし羯餧伽人の國を云ひ、唐の訶陵と同じ。同じく宋書(卷九七)に婆達國あり、元嘉廿六年入貢す、又闍婆婆達國あり、元嘉十二年入貢す、南史(卷七八)は誤りて闍婆達となす。Pelliot 氏は闍婆・婆達二國同時に入貢せる

ものと解せり。[14] 然れども是れ闍婆の婆達の意味にて、廿六年入貢の婆達と同じく、更に又先きに第三章に述べし唐の婆登と比定し得るものなり。[15] 要之宋書の呵羅單或訶羅陀は隋書の訶羅旦、唐書の訶陵にて中央Javaなり。是を南と云ふは、不穩當なれど實際の南は山地にて國のあるべき所ならず、然るに上代支那地理學者の癖として、强ひて四周を記し、以て其の位置を明かにせんとする風あり、從つて婆利を東とし、訶羅旦を南となせるに過ぎず。最後に赤土の北は大海なりと云ふは、室利佛逝の北の大海に一致す。

要するに次の四ケ條の理由によりて、赤土は室利佛逝と位置に於て一致することを主張せんと欲す。

一、隋代Menam下流域に投和國ありしこと。（第三章註2）

二、常駿等は馬來半島に沿ひて南下せること。（第四章）

三、唐代赤土の名なく、隋代室利佛逝の名無きこと。（第五章）

四、赤土の四周は室利佛逝のそれと一致すること。（第五章）

かくの如く、赤土と室利佛逝は時間的位置に於いても、亦地理的位置に於ても矛盾衝突をなさず。唯問題は赤土と室利佛逝と同一王朝なりや否やにあり。義淨によれば「末羅瑜今改爲室利佛逝也」と云ひながら、他方に末羅瑜と佛逝を二の地名となす所を見れば、當時末羅瑜は室利佛逝國王の新都となりしが、故の都は依然として佛逝の名を有せしものと解すべく、從つて佛逝は義淨以前より存在せしものと認め得。換言すれば室利佛逝國は義淨の時

始めて起りし國にあらざるを知る。されどその何時頃始まりしか徴するものなきを遺憾とす、Coedès 氏によるも Banka の銘刻は七世紀末に過ぎず。然しながら若し位置及國狀の類似より、赤土を室利佛逝と同一に見るを許さるれば、Srivijaya の建國は更に古きものとなる。

註

1 宋書(卷九七)に斤陁利あり、孝建二年王釋婆羅那隣陀は長史竺留陀を遣はして入貢す。また梁書(卷五四)に干陁利あり、天監元年王瞿曇修跋陀羅使者を遣はし、次で普通元年にも入貢す。斤陁利即ち干陁利は疑無き所、其の位置に關しては東西洋考(卷三)に「舊港古三佛齊也、初名干陁利、又名浡淋邦 Palembang」と云ひ、明史以下皆是に從ふ。然ども其の理由は一切不明なり。從つて Groeneveldt 氏もその說明に窮し Sumatra の古名 Andalus を引用せるも (Notes, p. 60) Andalus の起原明かならず、且又是を斤(干)陁利にてうつすこと當を得ず。されば Pelliot 氏は買耽の軍屯弄山 Pulao Condor を以て是に當つ。(Bulletin t. IV, p. 218) 此の島は交通の要衝に當りしため、支那によく知られ、南海寄歸內法傳の堀倫洲、册府元龜外臣朝貢部の景龍三年入貢の崐崙等は明に是なり、又舊唐書(卷一九七)に「自林邑已南、皆卷髮黑身、通號崑崙」と云ふは、此の島に本づきて起れる今の馬來人に對する名なり。されば Pelliot 氏の說は東西洋考の說より遙に理あり。

2 Bulletin, t. XVIII, nom. VI, "Le Royaume de Çrivijaya."

3 第三章註19參照。

4 義淨の高僧傳(卷下)玄達律師の條に「末羅瑜今改爲室利佛逝也」又南海寄歸內法傳に「末羅越洲即今尸利佛逝國是」と云ふ。然るに他方高僧傳(卷下)智弘律師の條に「東風汎海一月、到室利佛逝國(中略)

後乘王舶、經十五日、達末羅瑜洲、又十五日到羯茶國」と云ひ、南海寄歸內法傳にも室利佛逝の西に末羅遊を擧げたり。高楠博士は Sumatra 島上佛逝の西に置くも根據なし。 按ずるに是れ買耽の海峽の南に佛逝あり、北に羅越ありと云ふもの、藤田氏が摩羅越の畧と見たるは正しかるべし。(第三章註16） 又義淨の今改云々と云ふを、Coedès 氏の如く佛逝が末羅瑜を服屬せりとは解し難し、寧ろ遷都と解すべきにあらざるか、卽ち義淨以前には Palembang 地方に居りて室利佛逝國と稱せしもの、義淨の時末羅瑜に都を遷し、然も尙ほ國名及び舊都を室利佛逝と稱せりと解すれば如何。(藝文卷四號四藤田氏論文參照)

5 第四章 Schlegel、Gerini 兩氏の說參照。

6 I-tsing, p. xl.

7 T'oung Pao, s. II. v. II, p. 110-113; Bulletin, t. IV, p.341.

8 買耽曰はく「又西出硤三日、至葛々僧祇國、在佛逝西北隅之別島、國人多鈔暴、乘舶者畏憚之、其北岸則箇羅國、箇羅西則哥箇羅國、又從葛々僧祇四五日行、至勝鄧洲、又西五日行至婆露國、又六日行至婆國伽藍洲、又北四日行、至師子國」と。(Bulletin, t. IV, p. 349)

9 第三章註4參照。

10 葉波は梁書(卷五四)中天竺の條に「左右嘉維 Kapilavastu 舍衞 Sravasti 葉波 Champa 十六大國、去天竺或二三千里」とあり、文誤まると雖も、十六大國はその名明かにして、葉波は Champa ならざるべからず、Pelliot 氏誤りて業波羅と比較す。(Bulletin, t. IV, p. 272, note (1))

11 梵語 Karpāsa 馬來語 Kapas の譯。(Chau Ju-kua, p. 218-219)

12 東洋學報卷三頁一二七。

13 P.lliot 氏 Java と誤る。(Bulletin, t. IV, p. 174)

14 Groeneveldt 氏は闍婆達を法顯の耶婆提 Jabadin に比せしが、(Notes, p. 9) Schlegel氏始めて南史の省畧を發見し、闍婆・婆達二國とし馬來半島に置けり。(T'oung Pao, v. X, p. 251-252) 石澤氏は更に一說を出し、

南史は耶婆提を知りて故意に婆を省けるもの、Yule氏のYaba-kotiの對音なりと。(史學雜誌編十一頁一二〇二—一二〇三)されど南史が故意に省けることと信じ難く、又Yaba-kotiなるものの明かならず、Kotiを提とせることと無理なり。　Pelliot氏は闍婆・婆達二國同時に來貢せりとなすも婆達を知らず。(Bulletin, t. IV, p. 274.)

15 婆達・婆登は、恐らく西JavaのBantamならん。　藤田氏は義淨の莫訶信洲(訶陵と佛逝の間)をMaha Sundaの對音となすは、高楠氏のBorneoのBandjer Masin說より適當なり。(東洋學報卷三頁一三三)宋の諸蕃志は新拖と云ふ、但し其の都を云はず、Hirth氏等も亦說明せず。(Chau Ju-kua, p. 62, 66) されど明末の東西洋考(卷三)に「下港一名順塔」「加留吧、下港屬國也、半日程可到」又(卷八)に「錫蘭山港口Serang(打水四五托、用丙巳針六更)下港(舶人亦名順塔、再進入加留吧)」と云ふ所を見れば、下港・順塔はBantamにして、加留吧はJakatraなり。(Notes, p. 40.) 下港は支那名にて、嶺外代答に「闍婆又名甫家龍Pekalongan在海東南、勢下故曰下岸」と云へると同じ意味なるべし。　Crawfurd氏によれば、Jacatra (Jayakarta)は又Sunda Kalappa (Sunda of coco-palm)と稱せりと云へば、加留吧はKalappaなり。(A Descriptive Dictionary of the Indian Islands, p. 44) 是れより考ふれば諸蕃志の新拖もBantamなるべし、但しBantamの古き歷史傳はらぬを遺憾とす。

六

隋書以外赤土の名ある記事は次の如し。

赤土、隋時通焉、扶南別種也、(1)直崖州之南、渡海水行、便風十餘日、經鷄籠島至其國。(通典卷一八八)

赤土國、(脫)州南、渡海便風十四日、至鷄籠島、卽至其國、赤海之一洲中。(舊唐書卷四一)

是れ何れも隋書の記事或は同じ史料に本づく者か、又赤海之一洲中は赤海中之一洲の誤か。

赤土國、(中略)居僧祇城(亦曰獅子城)(中略)(冬至之日、影直在下、夏至之日、影在南、戸皆北向。)(通典卷一八八)

括弧の中は隋書赤土傳に無き文句なり。按ずるに唐代の挿入句にて、獅子城は僧祇をSimhaと解せしもの(孔雀王呪經上曰「僧伽、梁言師子」)、夏至之日云々は全く誤謬なり。[2]

金利毗迦國、在京西南四萬餘里(中略)東去致物國二千里、西去赤土國一千五百里、南去婆利國三千里、北去柳衢國三千里。(唐會要卷一〇〇)

太平寰宇記(卷一七七)冊府元龜(卷九五七)には金利毗逝、太平御覽(卷七八五)には舍利毗逝とあり。Pelliot氏の云ふ如く舍利毗逝を正しとすべし。されど致物、柳衢は他書に無く、檢し難し、若し強いて婆利をBaliとすれば是を南とするは穩かならず、又致物はJavaの不完全なる對音とし、柳衢は柳衞の誤にて賈耽の羅越とすれば、是を三千里とすることも怪しむべし。信ずべき史料によれば、赤土と佛逝は時代を異にするものにて、かくの如く東西相隣るとは云ひ難し。 按ずるに是れ唐代或る地理學者の誤解なるべし。

拘蔞密、在林邑之西、陸路三月行、山居饒象、並養之、以供用、顯慶元年閏正月來貢、在盤々致物國東南、海路一月行、南距婆利國十日行、東去不述國五日行、西北去文單六日行、風俗物産與赤土墮和羅同、永徽六年八月遣使獻五色鸚鵡。(唐會要卷一〇〇)

此の記事の前半によれば拘蔞密は林邑の西、暹羅或はBurmaの如く、[3]後半によれば南支那海

中の島の如く、全然解すべからず。こゝに注意すべきは此の記事にも致物あり、されば先きの金利毗迦の記事と同じ人の作か、且神龍以後陸眞臘の別名文單の名ある所を見れば、然も神龍以後のものなるを知るべし。新唐書(卷二二二下)は是を改めて盤々の條に

東南拘蔞密、海行一月至、南距婆利、行十日至、東距不述、行五日至、西北距文單、行六日至、與赤土墮和羅同俗、永徽中獻五色鸚鵡。

となすも、固より五十歩百歩なり。要するに唐會要の是れ等の記事は殆んど信用する能はず、從つてその中に赤土の名あるも、是れに由りて何の論も起すべからず。

赤土西南入海得婆羅、總章二年其王旃達鉢遣使者與環王使者偕朝。(新唐書卷二二二下環王傳)

是は他書に見えざれば、如何なる史料に本づけるか檢し難きも、若し信ずべしとすれば、西南は東南の誤りなるべし。されど總章二年に尙ほ赤土の名存せしとすれば、義淨頃の人々も是を聞知すべき筈、又環王は至德以後の林邑の名なり。

要之隋書以外の赤土の記事は、史料として價値乏しく、概ね唐代の誤解に本づく。されば是によつて吾人の說は動搖を感ずること無し。

最後に赤土の意味を論じ本稿を終結せしめんと欲す。隋書赤土傳は

所都土色多赤、因以爲號。

と云へど、是れ恐らく事實にあざるべし。同傳には

煬帝即位募能通絶域者、大業三年屯田主事常駿、虞部主事王君政等請使赤土、帝大悦、賜駿等帛各百匹時服一襲而遣、齎物五千段、以賜赤土王。

と云へど、赤土の名は嘗つて支那に知られざりしものなれば、常駿等の所云の赤土は、單に漠然南方の國の意味に過ぎざりしと考へらる。 何となれば五色を五方に配すれば、南は赤なれば、南方の國を赤土と云ひ得。 舊唐書に赤土は赤海にありと云ふ赤海も即ち此の意味なり、赤の代はりに炎を用ゐ、炎土・炎火國・炎海と云ふ例、寧ろ赤より多し。(4) されば赤土は支那名にて、本來の名は Srivijaya か。 而して常駿は始めより赤土と稱し、歸國後も赤土として煬帝に報告せし故、遂に本名を失せしにあらざるか。

1 唐武德中、隋の珠崖郡を改め崖州とし、後天寶元年再び珠崖郡に復し、乾元元年又崖州となす。(舊唐書卷四一)

2 是に反し義淨の「又如室利佛逝國、至八月中、以圭測影、不縮不盈、日中人立、並皆無影、春中亦然、一年再度、日過頭上、若日南行、則北畔影二尺三寸、日向北邊影同爾」と云へるは、確に赤道附近なるを知り得。(東洋學報卷三頁一三二)

3 藤田氏は唐會要の前半を信用して、拘蔞密は Kalayāni 銘刻の Golamattika (Pegue 海岸にありしと云ふ)に比定すれど如何にや。(藝文五年十號三一七頁)

4 天子の社壇を造るに赤土を用ゆ。 例へば「天子社則以色土、各以方色爲社壇五丈、諸侯則用當方之色爲壇、皆立樹以表共處」(通典卷四五)又「洪武四年五月丙寅、詔立大社壇于中都、命工部取五方之土築之、直隷應天等府、幷河南省進黄土、浙江福建廣東廣西進赤土、江西湖廣陝西進白土、山東進青土、北平進黒土。」(皇明實錄) 淮南子(卷四)に青海・白海・赤海・玄海・黄海あり、又(卷三)に「西南方曰朱天、南曰炎天、南

方火也、其帝炎帝」或は「西南方曰焦僥曰炎土」と云ふ。 山海經の「厭火國其人獸身黑色、火出其口中」の厭は炎に通ずべく博物志の「楚之南、炎人之國、其親戚死、刳肉棄之、然後埋其骨、乃成孝子」の炎人は炎火の誤か或は炎土の人の意味か。 抱朴子に「火浣布有三種、其一曰海中肅邱、有生自火、春起秋滅」と云ふ、肅は焦に通ずべく、春起秋滅は明に陰陽の消長なり。 又梁書扶南傳の中に「有馬五州、復東行漲海千餘里、至自然火洲」と云ふ。 Laufer 氏は Timor かと云へど、然らず、山海經(卷一六註)に郭璞は「今去扶南東萬里、有耆薄Java國、東復五千里許、有火山國」と云ふを見ば、實際のVolcanoと關係なし。(東洋學報卷七頁一四九―一五〇)南洋の火山にて、それと明かに認め得るは、明末の東西洋考(卷八)西洋針路に重加羅Sangaraの東に火山Tamboraあるに始まる。 炎海に就ては、例へば永樂六年十月會同館にて卒せし勃泥王に賜ひし辭に「炎海之墟、渤泥所處」と云ふ。 されど清の仇池石の羊城古鈔卷二に「虎門外以鹹、入夜則海水純丹、火光萬里、波浪乘風、如千萬火山衝擊、物觸之、輒生火花、鹹故生火也、而南海獨稱炎海者、即接暘谷、復邇扶桑、其精氣與日相摩而生火、故曰炎海」とあるは附會に過ぎたり。

略稱の解

An Official Guide—I. J. G. R., An Official Guide to Eastern Asia, volume V, East Indies.
Bulletin—Bulletin de l'Ecole Francais d'Extrême-Orient.
I-tsing—Takakusu, I-tsing: Records of the Buddhist Religion.
Notes—Groeneveldt, Notes on the Malay Archipelago and Malacca.
The Imperial—The Imperial and Asiatic Quarterly Review.